

大空と希望



No 4

一般社団法人 北海道認知症グループホーム協会
広報誌「大空と希望」2011年8月発行
〒060-0001
札幌市中央区北1条西7丁目1 広井ビル2F
電話 (011) 208-3320 フax (011) 204-7312
URL <http://h-gh.net>

ひとりとなり

ある会社の新年交礼会に招かれ、地元温泉に宿泊した時のことでした。

2次会の席上、ある会社役員の方（私の友人）が「自己紹介ゲーム！」と呼びながら、その自己紹介ゲームなるものを始めました。一般的な自己紹介ではなくて、あるテーマにそってそのエピソードも含めて話をするというものでした。 テーマは「温泉」。 2次会まで残る人たちですから、ある程度お互い気心の知れた人たちばかりなのですが、自己紹介ゲームが始まり、ひとり一人が「温泉」にまつわる話をしだすと、なんとまあ「そうだ

ったんだ」「知らなかった」等など、温泉のこと以外に様々な『ひとりとなり』が見えて来て、更に親交が深まる経験をさせていただきました。

私たちは、人の事がある一面でしか見ていなかったという事を、あらためて知り、経験し、感じ、気づかせていただきました。 人を理解するという事は、きちんと「話をする」「話を聞く」という、お互いの折り合おうとする力が成せる技なのでしょう。

感謝

一般社団法人 北海道認知症グループホーム協会
会長 宮崎直人

特集

地域の「ブロック活動」

今回と次回の「大空と希望」は全道10ブロックで独自に取り組まれている最新の活動をお届けします。



道東ブロック発

職員交流会

道東 ブロックでは、毎年研修の他にボウリング大会、パークゴルフ大会等を開催し、職員間の交流を図っていました。職員だけではなく、利用者さんが参加し一緒にカラオケを楽しんだ事もありました。

今年は趣向を変えて、「職員交流会」と銘打ち、“交流プラザさいわい”にて、会食をしながら、様々なゲームをして楽しみました。

このゲームはグループホームくつろぎの伊藤絹恵ホーム長（ブロック役員）はじめ職員のみなさんが考えて下さったもので、次々とお題の絵を描き伝えていく伝言ゲーム、並んで繋いだ足の間をフラフープで通していく輪くぐりリレーゲーム・役員の秘密？？等を盛り込んだ○×ゲーム等で豪華！？景品をかけおおいに盛り上りました。 今回は地方からも参加があり役員を含めて55名となり、賑やかで又和やかな横のつながりを感じました。

6月には、釧路で初めてリーダー研修を開催させて頂

いたことや、交換研修を含む様々な研修を重ねてきたことが、職員の交流を深めたのではないかと嬉しく思っております。

ちなみに、写真は、輪くぐりゲームの様子です。一番右はじめが佐々木会長です。ちょっとフラフラしています！！



迫るリングに不安を隠せない佐々木会長(写真右端)



オホツクブロック発

行方不明から安全に戻れる事を願う会

【検査ボランティア】

高齢化率25% の北見市では、3,125人の認知症者が生活していると推測されています。この認知症者のうち日常の生活動作は自立しているがBP SD（行動・心理症状）に対するサポートが必要なケースについて、私たちは考えていかなければなりません。

昨年の晩秋、隣町で要支援1でデイサービスセンターへ通所していた女性が、行方不明から3日後、水深わずかセンチの川岸で凍死体で発見されました。また市内では今年2月、朝ヒヨイと家を出た88歳の女性が家に戻れなくなり、夕方タクシーに保護されました。軽装だったために両手と顔に手術が必要な程の凍傷を負ったそうです。

このようないたましい事故が、市内全域でどのくらいおきているかはよくわかつていません。しかし家族から警察に出される検索願が年間60件ほどあり、加えて警察に届けずに家族や関係者のみで検索、保護しているケースを考慮すると相当件数が予想され見過ごせない状況なのは確かであります。そこで有志が集まって、家族と一緒に立場で検索活動を行うボランティア団体「行方不明から安全に戻れる事を願う会」がこの4月8日に設立されました。

家族から警察に検索願が出されたときに、同会の説明もお願いしており、ご家族が希望された場合に検索活動を行っております。

北見市内は非常に広域に及ぶため、やむなく今年は南部地域包括支援センターエリアの家族のみが支援対象ですが、年次的に広げていく計画です。会員は、包括支援センター職員、ケアワーカー、ケアマネージャー、福祉施設職員、グループホーム協会会員のほか民間企業所属の職員など60名で構成しています。

将来的には地域の町内会、民生委員、スーパー、ガソリンスタンドなどを含めて地域全体への参加を呼び掛けています。

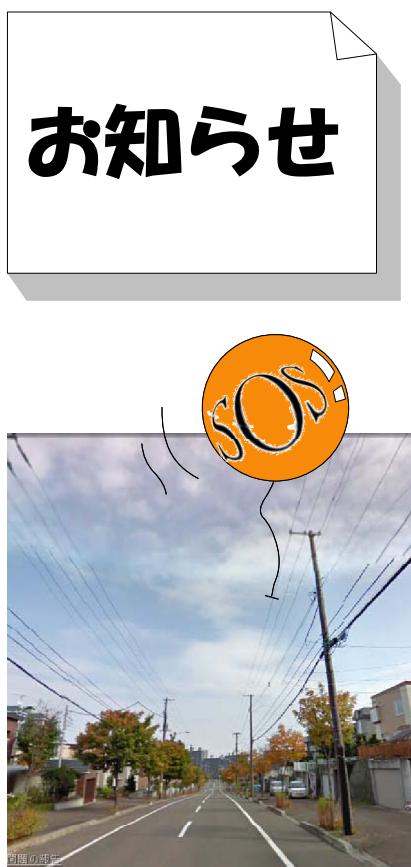
7月には認知症の人に優しいまちを目指す「圏域住民のためのSOSネットワークによるシンポジウム」開かれ北見市南部地区地域包括支援センターの対象地区（市北、光、豊地、若松など）の地域住民ら150人が参加し、演劇や講演を通じて認知症の症状や支援について理解を深めました。

また認知症のかたが徘徊（はいかい）中と想定して検索訓練も行い、実際の対応に備えて勉強することもできました。

地域で認知症者を支え、そして誰もが安心して老いられる街づくりをみんなで目指していきたいと考えています。

全道各地でSOS ネットワークフォーラム開催

今や緊急の課題となった認知症患者の見守りシステム作り。当協会は積極的に地域住民の理解を促進し、協力体制づくりに向けフォーラムを開催しています。当協会が主催、共催、後援などのかたちで開催予定のSOSネットワークをご紹介します。詳細は各ブロック責任者にお尋ねください。



●10月8日(予定)
場所：登別市
詳細は8月上旬に決定します。

●10月7日(金)
場所：勇払郡安平町追分公民館

●10月中旬
場所：滝川市公民館

●10月23日(日)
場所：札幌市清田区里塚・美しが丘地区センター
基調講演：GHわが家 小原陽一氏



十勝ブロック発

十勝

高齢者グループホーム協議会では、グループホームが本来目指している「認知症の人の暮らしを支える」「その人らしさを大切にする」という原点に立ち返ることを目的とし平成20年度より「相互研修事業」を取り組んでいくこととなりました。役員の事業所で試行的に実施、3事業所相互に行き来し一日を過ごし、その中の気付きを意見交換で伝え合い、確認し合いました。

その事により、受け入れる側・訪問する側相互にケアの振り返りや新たな気づき、評価を受けることでのモチベーションの向上にも繋がりました。

平成21年度は参加事業所を募り12事業所を3事業所毎に4つのブロックに分け実施しました。事業開始前には前年度の実施報告及び視点の統一を図る為に具体的な項目を定めました。その事により、相互に視点が定まりスムーズに混乱無く実施することができました。

また、反省点として評価色が濃くなってしまう事で参加希望事業所が限定されてくるのではないかという声もありました。

平成22年度はその反省も踏まえ、8事業所を2事業所毎に4つのブロックに分け実施、困りごとや不安な思いを共有することで明日への活力に繋げる事ができました。

この事業はケアの実践者だからこそ気付ける事や勇気付けられることがあります。そして、ケアの実践者だからこそ支え合える体制が築けると思います。



後志ブロック発

後志

ブロックの活動は研修が中心となっています。それは基礎的なところをきっちりと学んでいけば、応用場面は各グループホームの「良さの表現」へとなっていくと考えているからです。

各会員事業所も研修の機会は多くなっていると思われますが、ブロック内で研修をとおした交流も深め、介護スタッフの総体的なレベルアップを考えています。ですから、研修終了後はいつも講師を交えながら「反省会」という楽しい交流会が待っています。

昨年度、最後の研修会の講師には、協会研修担当理事の高橋芳美さん（滝川、グループホームコスマス代表取締役総合施設長）にお願いをしました。コスマスは「大草原の小さな家」のように「大草原の小さな民家を改造した小さなグループホーム」からはじまったようですが、お話を初任者から中堅レベルまで感動しながら聞ける内容でしたよ。

まさに現場主義のお話です。

事業所相互研修の取り組み

これからは定められた視点にこだわるのではなく、受ける側で「是非ここは見てほしい！」という点を研修前に事前に打ち合わせ、その点を軸として相互に困っている点やアピールしたい点等を意見交換にしてゆきます。

そして、その場限りで終わるのではなく、それぞれの事業所のケアの質向上につなげ「相互研修事業」が今後も意味ある事業として、全ての会員事業所が参加できるよう取り組んで行きたいと思っています。



博愛会 グループホームかたらい
理念

心をつなぎ合い、ふれ合い、その人らしい生活を楽しめるよう支援していきます

利用者に書いていただきました



ポジショニングに有効です



心が癒されます

『研修会』と『反省会』

今年度も現場に十分活かされる研修会を組みたいと思っています。

■ 後志 トピックス

なんといっても全道的に有名な「劇団こまわり」でしょう。この劇団は余市の「グループホームなかじま」さんの新岡施設長が座長で、団員も「なかじま」さんのスタッフで構成されています。

昨年はこの劇団活動をとおして「認知症の人たちも安心して住める街づくり」をめざす実践が認められ「北海道福祉のまちづくりコンクール、活動部門賞」を受賞しています。余市の新しい福祉文化といつていいでしょう。

■ 後志 トピックス つづき



中央は中島内科の中島恒子院長 右側二人目ネクタイ姿の人が新岡座長

全道の仲間の皆さん！

豊かな優しい「地域づくり」のために頑張りましょうと、「後志ブロック」より熱い連帯のメッセージを送ります。



道央ブロック発

【合同研修会】

道央ブロック恵庭・千歳では、消防署と連携をしグループホーム合同訓練研修を行ってます。

この研修は、平成21年4月に恵庭市消防署が主催で行ったことがきっかけで毎年行われている。研修の内容は、市内のグループホームが毎年持ち回りで、研修参加者に対し、担当になっているグループホームが避難訓練の展示、その後消防署職員がグループホームの職員となり、避難訓練の展示、避難誘導の搬送手段・方法などを行ってきた。

これまでには、火災のみを想定した合同訓練研修であったが、各グループホームから、以前より災害時の訓練研修を行いたいという要望と、3月11日東日本大震災の発生を受け被害状況が尋常ではない事、自分達もいつ災害に起こるかという気持ちがより一層強くなり、今回初めて地震を想定した研修会を行った。

この地区は、活断層があり直下型の地震が考えられ、地震が発生した後の避難するタイミング、地震が起こった際には、地域住民が皆被災者となり、その後の避難場所の確保、食材、職員の確保に大きな課題を、グループワークを行い検討し、今後のホームの訓練に活かせる研修会となった。今後は、市内にある大型福祉施設も交えて研修会を組み立てていければと思っております。

ワクワク発表会

待望の介護実践事例発表全道大会 いよいよ開催

厳選された介護実践事例が朝9時より夕方5時半まで一日たっぷり報告されます。

前泊される方には、日胆ブロック担当の『交流会』もご参加ください。

懇親会は11月9日午後6時より「ホテルローレル」にて。懇親会会費は1名5,000円で企画いたします。人数の取りまとめをいたしますので、参加できる人は

TEL (0146) 45-0020 又は FAX (0146) 45-0037 で静内ケアセンターまで申し込み下さい。

開催日 11月10日(木曜日)
場所 静内コミュニティセンター
新ひだか町静内古川1-1-2
電話 (0146) 42-0075

消防署とグループホーム



「人」に見立てた布団にやさしくタオルを巻き避難を開始



中央奥からは、消防署員の目が光る

認知症への理解を深めてもらおうと7月28～30日、函館-札幌間約300キロを舞台に初開催された駅伝。今回は主催された当協会の外部理事でもある井出訓放送大学教授とグループホームの入居者と共に参加したGHこもれびの家寺澤道恵さんにイベントを振り返っていました。

Run Tomo-rrow（ラントモ）を振り返って 井出 訓

去年の12月。佐呂間に仕事で出かけたおり、佐呂間の100Kウルトラマラソンに団体で参加できないだろうかと、地元の方に聞いたことを覚えています。いつの間にか趣味になってしまったジョギングを通じて、認知症の人や家族の方々と一緒に何かできないだろうかと考える中で、100Kをみんなの力で走りきいたらと思い立ったからです。ですが、既に大きなイベントとして開催されている佐呂間の大会に、団体として参加することはかなり難しいようで、仕方ないとその時はあきらめざるを得ませんでした。そのころからでしょうか、それならば自分たちで大会を開けばいいと考え始めたのです。

函館から札幌までの約300キロを、タスキをつなぎで走ってくる。そんな構想を話はじめると、笑われたり、走れるのかと疑われたり、無謀だと避難されたりと、否定的な反応も多くありました。ですが、どういう訳だか個人的には、何の根拠もないのですが、何となく行けるだろうという自信だけはあったように感じます。今考えると恐ろしいことでもあります。ただ、一人ひとりには大きなことができなくても、一人ひとりができる小さなことをつなぎ合わせていくことができれば、必ず大きな力を生み出していく事だけには確信がありました。なぜならば、それがフレンドシップクラブの原点だからです。だからとえ、一人の走る距離が1キロだろうが、100mであろうが、ほんの1歩であったとしても、そうした一人ひとりの一歩一歩がつながり合うことで、300kという果てしない距離を走破できると確信していました。

ラントモの3日間を通じて出会ったランナーやサポーターの方々の生き生きとした姿を見たとき、つながり合うことがどれだけ大きな力を生み出していくのかを、痛いほどに実感しました。また、当事者の方々やご家族が一步一步をつなぐ姿を見たとき、私たちは地域の中でも、「生きていく」という同じタスキを受け渡しあいながら、お互いに支え合い励まし合い暮らしているのだということを、改めて認識させられたように感じます。認知症になっても安心して暮らしていく町は、そうしたタスキをその地域に住むみんなが受け渡し合うつながりによって築かれていくのではないかと、ラントモを走りながら考えていました。

認知症フレンドシップクラブは、認知症になっても安心して暮らせる町づくりを目指しつつ、今日も走り続けます。ぜひ皆さんのお力をおかしください。



井出 訓
放送大学教授
専門は老年看護学
NPO法人認知症フレンドシップ理事長
北海道高齢者G H 協会外部理事



北海道新聞 H23.8.4日付け記事より

があり、合わせて『RUN伴』もお祭り騒ぎとなりました。

利用者の中には、RUNする為に靴・帽子・半ズボンを新潮し意欲満々で、散歩距離も更に広げたり、「フレンドシップで寄付金を募っている・・。」それは、ホームのお祭りの売り上げ金を寄付しよう!と不要になった生地で小物作りが始まり、ホームの祭りで販売悪天候の為品物の売り上げが伸びず・・。(残念)職員も寄付金を募り何とか形になる金額確保をし、「応援に横断幕を・・。」利用者と共に製作、「RUNに参加するには、ハチマキを」作成し、「旗も作ろう!」こもれび到着がお昼頃になるので、「軽い食事の準備を利用者と準備しよう!」と本当に祭り騒ぎでした28日からRUNが始まり、ツイッターで状況を確認しながら30日当日、苫小牧美々駅で『函館からの沢山の想いが詰まった櫻』を肩にずっしり受けRUNスタートこもれびの家からは、職員4名・利用者4名・伴走職員2名と計10名が24キロを担当しました。今回、フレンドシップのご配慮があり、ホーム目の前で次のグループに櫻の受け渡しが出来るため、ホーム全員で応援が出来ました。ホーム前をメイン通りにし、600m～100mと参加する距離は違いますが、オレンジのTシャツを着て4人の利用者は家族と伴走職員と共に櫻をつなぎ、最終走者は、両脇を家族に支えられ笑顔いっぱい歩いてくる利用者の姿に、ゴールではないのにテープが用意され『頑張れ!頑張れ!』コールで、大勢に囲まれながらの櫻の受け渡しは、目頭があつくなりました。皆で力を合わせれば、函館から札幌まで一本想いの詰まった櫻を繋ぐ事が出来る。このRUN伴の活動を通して、利用者と家族とホームが一体となり参加が出来た事、更に地域の方々に沢山の理解を頂く機会をつくって頂いた、フレンドシップの皆様に深く感謝をしております。ありがとうございました 是非、来年も・・・。



寺澤道恵
グループホームこもれびの家
ホーム長
北海道高齢者G H 協会理事

RUN 伴 TOMO-RROW こもれび編

寺澤 道恵

理事の井出訓先生から、函館から札幌まで認知症の人と一緒に走るRUNを企画していると聞き、ホームに持ち帰りスタッフに話すると、『参加しよう! 参加できる利用者も一緒に出よう! そして家族も一緒に参加してもらおう!』と即決し、早速行動を始めた。時期的にホームのお祭り

写真で見る300Km

初日(7月28日) 函館五稜郭公園—長万部間



2日目(7月29日) 長万部—苫小牧間



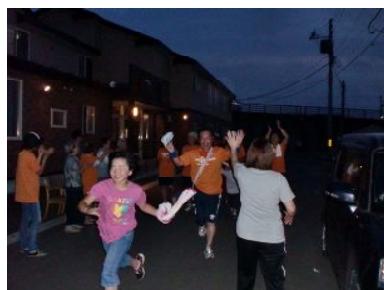
101歳です

GHでは横断幕づくりが進む

稲荷寿司作り

総合施設長も足取り軽く

3日目(7月30日) 苫小牧—札幌間



花縁のばば様たちが応援にかけつける

19:30倉地施設長が花縁に到着



寄付金が授与されました

たすきの字が細かくて・・

苫小牧美美



声援が心地よい

最終ランナーの味は格別

ついに札幌ゴールイン